巻頭言

社会の中の精神医療，社会を変える精神医学

水野　雅文　Masafumi Mizuno

第 121 回学術総会が成功裏に終わったばかりですが，このタイミングで巻頭言執筆の順番が回ってきましたので，来年の第 122 回学術総会会長として，次回大会（2026 年 6 月 18～20 日，於パシフィコ横浜ノース）のコンセプトを紹介させていただきます．

精神医学は，常に社会とともに歩んできました．戦争や災害，経済格差，孤立，情報化の進展など，社会的要因が精神の健康に深く関与していることは，近年の精神科疫学研究によって繰り返し示されています．一方で，精神医療は単に個人の病理にアプローチするだけでなく，人と人，制度と地域，過去と未来をつなぎ直す力をもっています．精神医学の営み自体が，社会構造のあり方を映し出し，時にそれを変革する可能性をもっていると確信しています．

次回の学術総会では，「社会の中の精神医療，社会を変える精神医学（Psychiatry in Society, Psychiatry for Society）」をテーマに掲げ，精神医学がいま社会のなかでどのように実践され，また社会の変化にどのような影響を及ぼしうるのかを多角的に検討したいと思います．今日，精神医学は大きな転換点を迎えています．個体の病理に焦点をあてた従来型の診断学的アプローチでは，社会の複雑化に伴い現れてきた新たな精神保健上の課題に対応しきれない場面が増えています．とりわけ，社会構造の急速な変化がもたらす新たな病理の出現と，それに対峙する精神医学の役割が問われています．精神科医には「個人の病」から「関係性の病」「社会的文脈の病」へと視座を拡張することが求められています．例えば，SNS を介した「つながり」がもたらす孤独感や，自己表現と承認欲求の過剰が引き起こす不安，自我の多重化，実存感の希薄化といった現象は，もはや個人の問題ではなく，環境との相互作用のなかで生まれる現代的病理です．こうした複雑な課題に応答するためには，診断基準の枠にとどまらず，症状の背景にある社会的・文化的要因に目を向ける臨床的想像力と，実践の柔軟性が不可欠です．近年注目されている当事者研究やピアサポート，ナラティヴ・アプローチなどの動向は，治療関係のあり方を問い直し，精神医療の再構築を促しています．

さらに，気候変動，パンデミック，紛争，ジェンダー不平等といった地球規模の課題にも，精神保健の視点から積極的に関与していく必要があります．精神科医には，医療者としての専門性に加えて，社会的アドボカシーや政策提言の役割も期待されています．多職種連携の実装が進むなかで，精神医療には専門職としての垣根を越え，多様な人々と協働する姿勢が求められています．従来の「専門家主義」から脱却しながらも，新たな時代の要請に応じた「開かれた専門性」を育むことが重要です．

次回学術総会では，臨床，研究，教育，制度，社会活動など，多様な実践の場で精神医学が果たしうる役割を問い直します．そして，精神疾患のある人々の声に耳を傾け，社会全体の精神的ウェルビーイングの向上に貢献する道を探ります．精神科医をはじめ，看護師，心理士，ソーシャルワーカー，作業療法士，薬剤師，研究者，当事者，市民活動に携わる方々など，多職種・多領域の皆さまと共に，精神医学の可能性を再発見し，次なる一歩を築く機会となれば幸いです．多くの皆さまのご参加を心より期待しています．

著者所属：日本精神神経学会理事/あさかホスピタル院長